



福井県教育庁埋蔵文化財調査センター所報 2

吉河遺跡発掘調査概報

1986

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター所報 2

吉河遺跡発掘調査概報

1986

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター



(1) 東方より見た吉河遺跡第1～第4次調査区



(2) 吉河遺跡主要出土品

序

敦賀は、古代から開かれた土地柄で、弥生時代や古墳時代の大規模な遺跡が数多く遺存しています。吉河遺跡の周辺でも、平野部には弥生時代の集落跡である中遺跡や坂の下遺跡が、また東側山麓部には向出山1号墳をはじめ、明神山古墳群や立洞古墳群など数多くの古墳があります。

吉河遺跡は、弥生時代中・後期の遺物が出土する集落跡ですが、敦賀市田結から同市鳩原まで市街地を東に迂回する一般国道8号線のバイパス建設予定地に位置し、事前に調査することになりました。発掘調査は昭和56年に着手、同60年に終了しました。

これまでの調査で、多数の方形周溝墓や墓道、幅広い溝、竪穴住居や掘立柱建物などの遺構を発掘するとともに、多量の弥生土器や石器、木器などを発見しました。本格的な墓道の検出は全国でもはじめてであり、にわりの土製品やカモシカの絵画文土器も珍しいものです。墓域と住居などの生活域がセットで発掘されたことは、弥生時代の集落を解明する上で重要な手がかりになり、膨大な資料の整理分析の進展につれ、往時の人々の日常生活や文化をより一層鮮明にできるでしょう。

出土遺物の整理には長期間を要し、早急に正報告書にまとめることは困難ですが、すこしでも早く調査全般にわたる概要を公開普及するため、このたび概報を作成した次第です。いささかもお役に立ちますれば幸に存じます。

最後になりましたが、発掘調査事業を進めるにあたり、建設省近畿地方建設局、同掘井工事事務所をはじめ、敦賀市教育委員会社会教育課や地元の皆様方、調査補助員の方々など多数のお世話になり、また調査員には多大の労苦をかけました。心から感謝申し上げます。なお、文化庁ならびに奈良国立文化財研究所、大阪大学、大阪市立大学、筑波大学、富山大学、奈良大学、広島大学、平安博物館などの諸機関や小林行雄京大名誉教授をはじめ諸先生方には、ご多忙にもかかわらず懇切なるご指導を頂き、また安田喜憲先生には本誌のために貴重な玉稿を頂戴しました。厚くお礼申し上げます。

今後とも皆様方の暖かいご指導、ご支援を賜りますよう、切にお願い申し上げる次第です。

1986年3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

所 長 藤 原 武 二

例 言

1. 本書は、建設省近畿地方建設局福井工事事務所からの受託事業として、福井県教育庁文化課が1981～85年（昭和56～60年）に実施した、一般国道8号線敦賀バイパス建設に伴う吉河遺跡の発掘調査概報である。本遺跡の発掘成果については、1983年（昭和58年）に『第1～第3次発掘調査概報』を発行したが、その後の調査の進捗に伴って遺構番号の整理・改称を行ない、また、新たな事実も判明するなど、既報の内容に追加すべき点も多い。そこで、今回改めて第1～第3次調査の成果をも含めて、本書を『第1～第6次発掘調査概報』として構成した。
2. 吉河遺跡の発掘調査は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、遺物整理作業は現在も継続中である。発掘にあたっては、建設省近畿地方建設局福井工事事務所工務課・高山大学人文学部考古学研究室・敦賀市教育委員会社会教育課・気比史学会・敦賀美術考古学会・私立敦賀博物館などの協力を得ている。また、発掘調査、遺物整理、資料分析等においては、文化庁ならびに小林行雄京都大学名誉教授をはじめとする各大学の諸先生方に、指導・援助を頂いている。
3. 本書の作成は、中司照世・工藤俊樹・月輪 泰があたり、下記のように分担執筆したが、花粉分析については広島大学安田喜憲先生に執筆をお願いした。また、放射性炭素年代測定については学習院大学木越邦彦先生による結果報告書を収録した。なお、遺物写真のうち木器など一部を除いて、エーアンドエム両出版株式会社荒川 明氏の撮影になるものである。
Ⅰ、Ⅱ-1、Ⅲ-1、Ⅳ-2-B・C、工藤俊樹 Ⅱ-2、Ⅳ-1、Ⅳ-2-A・D・E、
Ⅵ 中司照世 Ⅲ-2 月輪 泰
4. 本書の編集は中司があたった。本書作成までに種々の指導・協力を頂いた関係諸機関ならびに関係各位に深謝したい。

目 次

I	調査の経過	1
II	古河遺跡の位置と周辺の地理的・歴史的環境	7
	1 地理的環境	7
	2 歴史的環境	8
III	遺 構	14
	1 遺構序説	14
	2 遺構各説	14
IV	遺 物	24
	1 遺物序説	24
	2 遺物各説	24
V	自然科学的調査	43
	1 古河遺跡の年代測定	43
	2 古河遺跡の花粉分析	45
VI	ま と め	48

図 版 目 次

		本文対照頁
口 絵	(1) 東方より見た古河遺跡第1～第4次調査区	2～4
	(2) 古河遺跡主要出土品	32～40
図版第1 遺 跡	第1～第6次調査区合成写真	2～5・14
図版第2 遺 跡	(1) 第1・第2次調査区航空写真	2・3
	(2) 第1～第3次調査区航空写真	2・3

図版第3	遺 跡	(1) 第4次調査区北部地区航空写真	4
		(2) 第1～第4次調査区航空写真	2～4
図版第4	遺 跡	(1) 第5次調査区航空写真	4・5
		(2) 第6次調査区航空写真	5
図版第5	遺 跡	(1) 北方より見た竪穴住居1	14
		(2) 北方より見た竪穴住居2	14・15
図版第6	遺 跡	(1) 北方より見た竪穴住居3・4	15
		(2) 南方より見た竪穴住居5	16
図版第7	遺 跡	(1) 北方より見た竪穴住居6	16・17
		(2) 東方より見た掘立柱建物1	17
図版第8	遺 跡	(1) 東方より見た掘立柱建物2	17
		(2) 南方より見た掘立柱建物3	17
図版第9	遺 跡	(1) 東方より見た掘立柱建物4	17
		(2) 東方より見た掘立柱建物5・6	18
図版第10	遺 跡	(1) 南方より見た掘立柱建物7	18
		(2) 東方より見た掘立柱建物8	18
図版第11	遺 跡	(1) 南方より見た溝16南部における遺物検出状況	19
		(2) 北方より見た溝16北部における遺物検出状況	19
図版第12	遺 跡	(1) 北方より見た溝106	19
		(2) 北方より見た墓道と方形周溝墓群	19・20
図版第13	遺 跡	(1) 東方より見た方形周溝墓2	20～22
		(2) 北方より見た方形周溝墓3	20～22
図版第14	遺 跡	(1) 東方より見た方形周溝墓9	20～22
		(2) 東方より見た方形周溝墓13・14	20～22
図版第15	遺 跡	(1) 西方より見た方形周溝墓18	20～22
		(2) 北方より見た方形周溝墓10東溝壺棺	21
		(3) 南方より見た方形周溝墓20西溝壺棺	21
図版第16	遺 跡	(1) 西方より見た土壙18	22
		(2) 東方より見た土壙76	22
		(3) 南方より見た土壙80	22
		(4) 南方より見た土壙81	23
図版第17	弥生土器		24～29
図版第18	弥生土器		24～31

図版第19	弥生土器	24~31
図版第20	石 器 (1) 石鏃	32~35
	(2) 石庖丁	32・34・35
図版第21	石 器 (1) 大型石庖丁	32・34・35
	(2) 片刃石斧	32~35
図版第22	石器・土 製 品 (1) 太型蛤刃石斧	32・33・35
	(2) 鵝形土製品、土玉、土製紡錘車、土製円板、算盤玉形土製品	36・37
図版第23	玉作り関 係 遺 物 (1) 管玉、管玉未成品、碧玉材、玉錐	37~40
	(2) 玉鋸	37~40
図版第24	木 器 (1) 槽	40・41
	(2) 弓、鋸、用途不明木器	40~42
図版第25	花粉化石顕微鏡写真	46
図版第26	花粉化石顕微鏡写真	45・46
図版第27	花粉化石顕微鏡写真	46
図版第28	花粉化石顕微鏡写真	46
図版第29	花粉化石顕微鏡写真	47
図版第30	花粉化石顕微鏡写真	46・47

挿 図 目 次

第1図	西方より見た試掘調査時の吉河遺跡	1
第2図	吉河遺跡第1~第6次調査区	2
第3図	北方より見た吉河遺跡第1・第2次調査区	3
第4図	東方より見た吉河遺跡第1~第3次調査区	3
第5図	西方より見た吉河遺跡第4次調査区北部	3
第6図	北方より見た吉河遺跡第1~第4次調査区	4
第7図	南方より見た吉河遺跡第5次調査区	4
第8図	南方より見た吉河遺跡第6次調査区	5
第9図	敦賀平野の地形分類図	7
第10図	吉河遺跡の位置と周辺の遺跡分布図	8・9
第11図	南方より見た向出山1号墳1号石室	9
第12図	敦賀市内出土遺物実測図	9

第13図	明神山古墳群分布図	10
第14図	深山寺経塚群出土鏡実測図	12
第15図	吉河遺跡遺構分布図	14・15
第16図	吉河遺跡竪穴住居1・3・4実測図	15
第17図	吉河遺跡竪穴住居2・5実測図	16
第18図	吉河遺跡竪穴住居6実測図	16
第19図	吉河遺跡掘立柱建物1～4実測図	17
第20図	吉河遺跡掘立柱建物5～8実測図	18
第21図	吉河遺跡方形周溝墓2・9・14実測図	20
第22図	吉河遺跡方形周溝墓21実測図	21
第23図	吉河遺跡土壇18・76・80・81・88実測図	23
第24図	吉河遺跡出土土器実測図(1)	25
第25図	吉河遺跡出土土器実測図(2)	26
第26図	吉河遺跡出土土器線刻絵面文拓影図	31
第27図	吉河遺跡出土石器実測図	33
第28図	吉河遺跡出土石庖丁実測図	34
第29図	吉河遺跡出土土製品・石製品実測図	36
第30図	吉河遺跡出土玉類ならびに玉作り関係遺物・金属器実測図	38
第31図	吉河遺跡出土木器実測図	40
第32図	弥生時代後期の土壇墓模式的層序と花粉分析試料採集地点	45
第33図	吉河遺跡弥生時代中期土壇墓の花粉ダイアグラム	46・47
第34図	イネ科の赤道径の頻度分布	47

表 目 次

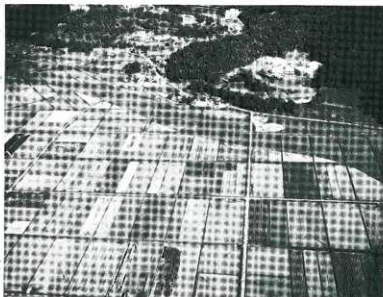
第1表	吉河遺跡方形周溝墓一覽表	21・22
第2表	吉河遺跡出土弥生土器観察表	27～31
第3表	吉河遺跡出土石器観察表	34・35
第4表	吉河遺跡出土土製品・石製品観察表	37
第5表	吉河遺跡出土玉類ならびに玉作り関係遺物・金属器観察表	39・40
第6表	吉河遺跡弥生時代中期樹木花粉出現率表	46・47
第7表	吉河遺跡弥生時代中期草木花粉・胞子出現率表	46・47

I 調査の経過

敦賀は古来より、近畿と北陸を結ぶ交通の要地として重要な位置を占めてきた。現在もその位置は変わらず、国鉄北陸本線、北陸自動車道、一般国道8号線など、北陸路の主要交通機関はいずれも敦賀を経由している。このうち敦賀市街を南北に貫く一般国道8号線は、市街地中央部で一般国道27号線と分岐し、近年その交通量増加に伴い著しい渋滞を生じるようになった。この渋滞緩和のため建設省近畿地方建設局福井工事事務所（以下建設省と略す）は、1970年（昭和45年）に敦賀市^{たけ}田結^けから同市^{はつはら}鳩原^はまで市街地を東に迂回するバイパスの新設を立案した。建設省はこのバイパス新設計画に関連し、路線予定地内における遺跡存在の有無についての照会を関係各局に対して行ったが、当時は敦賀平野における遺跡の把握は極めて不十分なものであり、満足な回答を行えない状況にあった。こうした状況のもと1976年（昭和51年）には、敦賀市教育委員会社会教育課職員が、バイパス新設予定地内において、当地域の古墳群で最も中核的な存在とも言える明神山古墳群を確認した。このため建設省では、改めて全路線予定地内における遺跡存否の確認を、福井県教育庁文化課（以下県教委と略す）に要請した。これを受けて県教委は、路線予定地のうち中一坂ノ下地区についての分布調査を、1981年（昭和56年）4月13日に実施した。この結果、古河区の路線予定地内において弥生時代の遺物を含む層を確認し、初めて吉河遺跡の存在が明らかとなった。県教委は、吉河遺跡の性格および範囲を確認するため、1981年（昭和56年）5月18～25日の間、8ヵ所のトレンチによる試掘調査を実施した。その結果吉河遺跡は、弥生時代中～後期の集落遺跡であり、バイパス路線予定地内における推定面積は6,000㎡におよぶものと考えられた。しかしながら試掘調査で検出した遺構・遺物は予想外に少なく、遺構は土壌2基、溝2条、柱穴2個、遺物はコンテナバット2箱分ほどを得たにとどまった。

この試掘調査の結果に基づいて、建設省と県教委は改めて協議を行い、同年秋より記録保存のための緊急調査を実施することとした。

吉河遺跡の調査は1981年（昭和56年）10月より開始し、1985年（昭和60年）5月まで延5年、6次にわたり、当初の予想



第1図 西方より見た試掘調査時の吉河遺跡

I 調査の経過



第2図 吉河遺跡第1次～第6次調査区 (縮尺1/1,500)

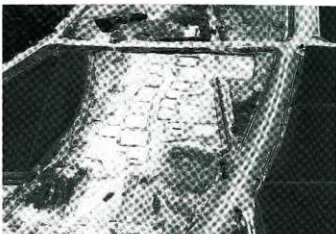
をはるかに上回る、多数の遺構・遺物を検出した。以下各次調査の経過を略述しておきたい(第2図)。

第1次調査 調査期間1981年(昭和56年)10～12月、調査面積約1,015㎡。バイパス路線内における遺跡の全面発掘を計画し、10mメッシュによるグリッド割り(北より0～25列、西よりA～M列)を行った。試掘調査を補足し、より正確な遺跡の内容を把握するため、遺跡中央部を南北に縦断するトレンチを設定し調査を開始した。トレンチ北部では試掘調査同様、希薄な遺構を検出するにとどまった。これに対しトレンチ南部では複数の方形周溝墓を検出し、さらにトレンチを東側に拡張することによりその群集が明らかとなった。当初の予想に反する良好な遺構の存在から、調査は遺構検出作業と遺跡の範囲を再確認する作業を併行して行うこととした。調査の結果、群集する10基の方形周溝墓ほかを検出し、遺跡の路線内面積は約13,400㎡におよぶものと推定された。

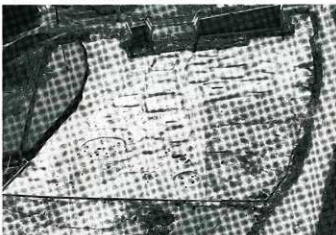
第2次調査 調査期間1982年(昭和57年)3～6月、調査面積約2,310㎡。第1次調査

区に南・西接する地区および、農道南方の地区を対象として調査を実施した。前者の地区では、整然と営まれた方形周溝墓群のほか、墓道、方形周溝墓群の西縁を流れる自然流路などを検出した。検出遺構のうち墓道は、方形周溝墓群中央を南北に貫く「幹道」と各墓を結ぶ「枝道」から成り柱目を照いた。また方形周溝墓の総数は23基となった。後者の地区では、後世の削平のため、遺溝を検出することはできなかった。

第3次調査 調査期間1982年(昭和57年)10～12月、調査面積約2,376㎡。バイパス本線部分南半で未調査であった、第1次・第2次調査区周辺の調査を実施した。調査は方形周溝墓群に北接する地区から開始し、新たに方形周溝墓1基、円形の大型竪穴住居1棟を検出した。方形周溝墓群に東・西接する地区の調査では、未完掘であった遺構を完掘したほか、方形周溝墓群の東縁では北流する自然流路1条を検出した。さらに北方へと調査を進め、新たに竪穴住居3棟を検出したほか、多数の土壌、溝、柱穴を検出した。また骨片の検出から、土壌の一部は土壌墓と判断された。今回の調査により、本遺跡が南部の墓域と北部の住居域で構成される、集落遺跡であることが推測された。



第3図 北方より見た吉河遺跡第1・第2次調査区



第4図 北方より見た吉河遺跡第1～第3次調査区



第5図 西方より見た吉河遺跡第4次調査区北部地区



第6図 北方より見た吉河遺跡第1～第4次調査区



第7図 南方より見た吉河遺跡第5次調査区

第4次調査 調査期間1983年(昭和58年)3～12月、調査面積約5,223㎡。バイパス本線内北半の調査を実施した。今回の調査は工事工程に合せ、遺跡北端部より調査に着手し、その後南方へと調査を進めた。その結果、第3次調査で検出した方形周溝墓東縁を北流する流路の下流部、および住居域を構成する多数の遺構を検出した。遺構は流路の両岸に広がるが、うち東岸の遺構は不定形の落ち込みや流路を主体とし、明確な遺構としては掘立柱建物1棟を検出したにとどまった。これに対し西岸では、本遺跡の住居域と墓域の一部を構成する、多数の遺構を検出した。遺構は複雑に重複しており、主要な例として竪穴住居1棟、掘立柱建物6棟、方形周溝墓1基があるほか、土壌墓を含む土壌、溝、柱穴多数を検出した。また出土遺物は、今回の調査が住居域を中心としたことから、それまでの調査に比べ量的に著しく増加した。またその内容も、自然流路内より出土した木器や土壌より出土した鶏形土製品など、豊富なものであった。今回の調査により、遺跡南部の墓域が方形周溝墓群とその北縁に分布する土壌墓群から成ることが判明するとともに、北部住居域の内容もさらに明確なものとなった。また自然流路東岸への後期における遺構の進出も確認された。

第5次調査 調査期間1984年(昭和59年)3～12月、調査面積約1,942㎡。前回の調査で本線内の調査は終了し、残された側道部分の調査を開始した。このうち濃密な遺構分布が予想される、側道北部の地区から調査に着手した。同地区では第4次調査同様多数の遺構を検出したが、なかでも2回の拡張を行った大型の竪穴住居床面からは、碧玉細片が多く出土し、本遺跡が玉作り遺跡であることを推測させた。これ以外の主要な遺構として、掘立柱建物1棟を検出した。また遺物では、調査

区北端の自然流路から木器とともに銅鍔1個が出土したほか、カモシカを描いた2個体分の絵画文土器や完形の磨製石剣が出土した。住居域部分の調査後、方形周溝墓群西側の調査を開始し、第2次調査検出の西側自然流路に合流すると思える、溝1条を検出した。

第6次調査 調査期間1985年（昭和60年）3～5月、調査面積約534㎡。側道部分に残された、遺跡南端地区の調査を実施した。



第8図 南方より見た吉河遺跡第6次調査区

遺跡西縁を北流する自然流路ほかを検出した。遺物は若干の土器、石器を得たにとどまった。

なお、本遺跡の調査関係者は下記の通りである。

建設省近畿地方建設局福井工事事務所

山本淳二（元所長）、山田 功（同）、三好逸二（前同）、宮下 武（現同）、水嶋 清（工務課長）、宮下正義（元同道路工務係長）、中広善一（前同）、多田勝義（現同）、平木武志（元同設計第2係長）、仲 明行（前建設監督官）、袖川正支（現同）

調査事務局（福井県教育庁文化課）

熊谷貞敏（元文化課長）、山口増喜（前同）、西川数丸（現同）、山田武男（前同参事）、折橋英雄（前同課長補佐）、中島昭四（前同）、上杉 命（現同）、鈴木外夫（元同文化振興係長）、山本靖夫（前同）、辻 漫頭（現同）、中西雅夫（同文化財保護係長）、山本広子・堀江祥子・矢野孝信（以上前同主事）、田川時子・吉川美智子・島田英夫（以上現同）

発掘調査員

中司照世・工藤俊樹・仁科 章・山口 光（以上福井県教育庁埋蔵文化財調査センター文化財調査員）、池田雄二（前敦賀市教育委員会事務局社会教育課主事）、森下 敏（現同）

発掘調査補助員

荒川 史・木原 光・田上浩幸・中川 渉・野末浩之・坂 靖志・大竹 豊・吉田正人・宮田佐和子・吉田由香・坂口美智子・夏原宏子・前田淳子・永野かおる・平田恵美子・紺道純子・藤野良子・北川美佐子・杉本弓子・伊藤政美（以上富山大学学生）、森下浩行（同志社大学大学院生）、山本英之・大室一宏・工藤茂博（以上同大学学生）、赤沢徳明・清水敏子（以上同学院大学学生）、望月精司（中央大学学生）、月輪 泰（大谷大学大学院生）、中井精一（天理大学学生）、月輪 理（岡山大学学生）、平井敏勤、最上博子

I 調査の経過

発掘調査作業員

山口正雄・滝口 勝・前田昭典・武内みち恵・前田千代子・山口よしえ・瀧口とめ・吉谷はつ・奥野かね・山口裕子・高木豊子（以上古河区）、寺腰繁三・成田清一・成田 勇・池上治三郎・成田治郎・成田はるえ・成田とみ子・成田みよ・成田こんめ・池田とめ・飯田はるえ・飯田千津枝・奥田吉枝・奥田みちえ・中谷としえ・酒井はつ（以上坂ノ下区）、藤森 生・藤森昌子・塚本ふさえ・金井初枝・中宮 都（以上中区）、納谷りよ子・草崎ふさえ・坂口芳子・納谷和代・草崎和美・岸本まゆみ・坂本冽子（以上深山寺区）、高木つわ子・坪塚つた子・茶谷久江・斉藤敏子・田上高美枝・石塚幸枝・中村佐智子（以上豊曲区）、山本武雄・山本すて・稲葉ひさ・平松富江・平松洋子・桃谷福子・平山照子（以上高野区）、北野弘太郎・高橋勝一・北野健司・高橋良江・中原美津子・西田千代子・萩原幾子・北野きぬ枝・田辺幸子・東出悦子（以上余座区）、宮本房枝・宮本ヨシ江・岸本つき・宮本高美子・山本花子・小西純子（以上大蔵区）、牛鬼和江・竹内をみ・吉田木子・吉田八重野・江口浩子（以上井川区）、田中照子・金井のお子・宮下富美子（以上阿曾区）、寺田鉄子・柿本八重子（以上葉原区）、桑野弘子・桑野裕子（以上新保区）、吉見キミ子（川北区）、布谷道治・杉田和弘・山田綾子（以上只竹町）、和田敏男（津内町）、河下駿馬（三島町）、南雲良規（公文名区）

遺物整理作業員（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター）

大藤文子・宇野和子・増田由里・片岡ひとみ・川崎順子・伊内スミ子・林 洋子・酒井恵美子・山田基容子・梅原道代・木村恵美・村中順子・前田由美恵・柳本千鶴美・小森早苗・岩崎早苗・高岡紀子・古川みどり・藤井尚美・炭山宏子・平野泰恵・坂下品子・中野恵子・斉藤紀子・辻本雅代・細田栄子・斉藤律子・石塚則子・坪田啓子・釣部聡美・舟沢美樹・後藤朱実・酒井美由紀・土橋さとみ・竹山一美

注

- ① 調査の実施にあたっては、きわめて多数の方々に指導や教示を頂いたが、今回は直接の関係者のみの記名にとどめた。いずれ本報告に掲載することで謝意を表したい。

II 吉河遺跡の位置と周辺の地理的・歴史的環境

1 地理的環境

吉河遺跡は、福井県敦賀市吉河字樋ノ水に位置する。吉河遺跡の所在する敦賀市は、福井県のほぼ中央に位置し、周囲を木ノ芽・越美・野坂の各山地と敦賀湾に囲まれた、東西南北各約5kmの扇形を呈する敦賀平野をその中心としている。以下、敦賀平野の地形について、概括的に記述することとする(第9図)。

琵琶湖北岸の野坂山地内には、本州大破砕帯の一部を形成する断層・地溝が多数存在するが、その一部は野坂断層・木ノ芽断層として、敦賀平野南東および西の縁辺に顕著な階段状の断崖崖を見せ、平野の生成はこ



第9図 敦賀平野の地形分類図(注1 文献より改変・転載)

れら断層線に沿った地盤の沈降作用によると考えられている。敦賀平野に流入する主要な河川は、野坂山地内を源とする黒河川・笠ノ川と木ノ芽山地内を源とする木ノ芽川であり、平野内で合流し笠ノ川となり敦賀湾へと注いでいる。これら3河川は平野流入に伴い、それぞれ黒河川扇状地・笠ノ川扇状地・木ノ芽川扇状地と呼称される扇状地を平野東部～南部に連続的に形成しており、この一帯は複合扇状地となっている。また、主要3河川の山間部および山間出口部には、洪積世の形成にかかわる開析扇状地・河岸段丘が存在する。これに対し平野北端の海岸線には、「気比の松原」として著名な浜堤が形成されている。この浜堤は形成時期を異にする3列の浜堤列から成り、その形成は弥生時代中期以前と考えられている。現在この浜堤東部は、開発によりその風景を失っている。扇状地と浜堤に挟まれた平野中央部は、地表勾配が緩慢な地域であり、潟湖上を河川堆積物が埋積した三角州低地となっている。このほか平野東部と西部の出入の著しい山脚周辺の地域には、背後の山地の沈降により生じた湿地帯(漏れ谷)が、また平野北西部の山麓には、風化岩屑により形成された岩盤が、それぞれ特徴的な地形として認められる。このように敦賀平野の地形は大きく分けて、北端海岸線の浜堤・平野中央部の三角州低湿地・平野南および西縁山際の扇状地の3つから成るといえる。

さて、この敦賀平野内に所在する吉河遺跡の立地を見れば、大略的には、笠ノ川扇状地の北東末端部、木ノ芽断層により形成された断崖下の標高約10mの地点に立地する遺跡とすることができる。また、上述のように遺跡の北方には、三角州低湿地および木ノ芽扇状地との縫合部に生じた遅堆積の低湿地が存在しており、水田としての利用が推測される。さらに遺跡周辺の地形を見れば、本遺跡の立地する笠ノ川扇状地上は南西から北東に向って傾斜を見せており、調査で検出

した2条の自然流路は扇状原上の微妙な起伏に沿い、この緩斜面上に舌状の地形区画を与えている。本遺跡はまさにこの舌状区画内に立地する遺跡である。

2 歴史的環境

現在、敦賀市内で出土している遺物は縄文時代以降のものであり、旧石器時代の出土例は存在しない。また、縄文時代に属する遺物も未だきわめて断片的なものであって、明確に遺跡と断定しうる例は存在しない。参考までにそれらの遺物の出土地を列挙すれば、白木（土器片）、山の上1号墳^④（中期土器片、磨製石斧、第10図16）、吉河遺跡（後期土器片、同図20）、常宮（磨製石斧）、立洞2号墳^⑤（石甕、同図13）ならびに明神山古墳群（中期土器片、同図24）である。

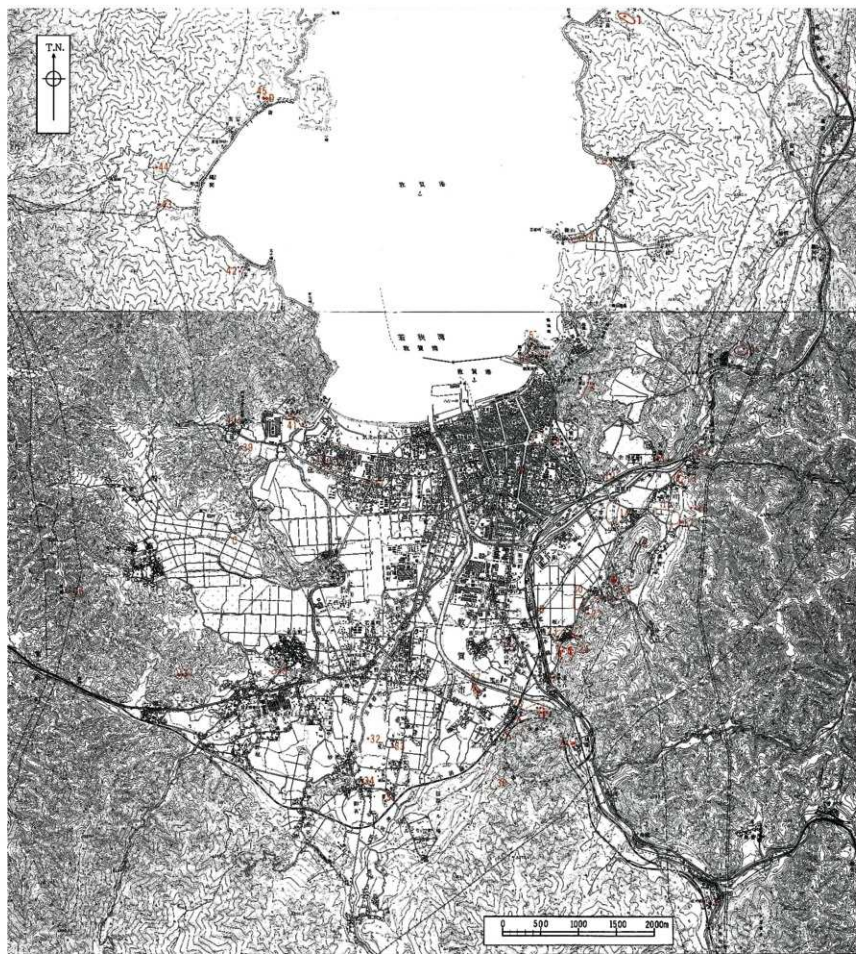
弥生時代の遺跡も未だ発見例は少ない。吉河遺跡以外には3遺跡が確認できているに過ぎない。そのうち松島遺跡^⑥（同図47）は、既述の3列の浜堤のうち最も南部に位置する浜堤上に所在し、早く中期の土器片若干が採集されている。次に、中遺跡^⑦（同図14）は中西方の木ノ芽川扇状地上に位置する。1976・77年（昭和51・52年）、福井県教育庁文化課が北陸自動車道建設に先立って緊急調査を実施した。その結果、遺構は溝など比較的少数の検出例にとどまったが、後期の弥生土器など多数の良好な資料が出土した。さらに、坂ノ下遺跡（同図23）は笹ノ川扇状地上、現集落下に位置する。1981年（昭和56年）、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが、一般国道27号線金山バイパス建設に先立って試掘調査を実施した。調査地は遺跡の北端部と思え、後期の弥生土器若干と鉄器1個が出土した。なお、単独の遺物出土地であるが、馬坂（同図C）で中期の燧1個が採集されている。

古墳時代の遺跡のうち、集落跡の確認数も少ない。上述の中遺跡で中・後期の土師器、須恵器が、吉河・坂ノ下両遺跡で前・後期の土師器、須恵器が、志比前神社遺跡^⑧（同図26）で中期の土師器が各々若干ずつ出土しているに過ぎない。また、長沢（同図B）で前期の土師器片数個が、杵丸山古墳山麓（同図D）で後期の須恵器1個（第12図3）が採集されている。

一方、古墳については、『敦賀市通史』に石井左近氏による成果が報告されており^⑨、他の時代と比べてきわめて多い。昨年までの再調査によって確認しえた基数は、70基を数える。以下、発掘調査が実施された古墳を中心に、一部主要な未調査墳についても説明する。

金ヶ崎古墳（同図5）は、敦賀湾に突出する通称金ヶ崎の丘陵端に位置する。本墳は直径約19mを測る円墳である。1909年（明治42年）に長さ約150cm、幅約36cmの竪穴式石室を発見し、珠文鏡1面をはじめ鉄刀、銀製品などが出土している^⑩。戦災のため大半の出土品が現存せず、詳細が判明しないが、5世紀の古墳であろう。

立洞古墳群（同図13）は、井川北方の木ノ芽川がまさに敦賀平野に流れ出た南岸の丘陵端に位置する。本古墳群は、帆立貝形古墳1基（2号墳）、円墳3基（1・3・4号墳）からなる。1976年（昭和51年）、福井県教育庁文化課が北陸自動車道建設に先立って2号墳の緊急調査を実施した。墳丘は全長約24mを測り、北方に面する前方部と段築・葺石をそなえる。長さ6.9m、幅0.77mを測る荊竹形木棺から、素文鏡1面、石鏃3個、竹櫛2個、管玉6個などが出土している。



第10図 吉河遺跡の位置と周辺の遺跡分布図 (縮尺1/50,000)

- | | |
|--------------|-------------|
| 1 礪山古墳・礪山城跡 | 27 宮山古墳群 |
| 2 栗原古窯跡群 | 28 堂古墳群 |
| 3 赤崎遺跡 | 29 堀原1・2号墳 |
| 4 鞠山遺跡 | 30 山足古墳群 |
| 5 金ヶ崎古墳 | 31 足由城跡 |
| 6 金ヶ崎経塚 | 32 狐塚古墳 |
| 7 金ヶ崎城跡 | 33 栗野南小学校古墳 |
| 8 天間山城跡 | 34 黒河1・2号墳 |
| 9 堂山岩跡 | 35 天満神社古墳 |
| 10 前山古墳 | 36 旗護山城跡 |
| 11 大塚1・2号墳 | 37 金山城跡 |
| 12 深山寺経塚群 | 38 沢遺跡 |
| 13 立湖古墳群 | 39 善衆衣谷横穴 |
| 14 中遺跡 | 40 妙華谷横穴 |
| 15 高野遺跡 | 41 櫛山川古墳群 |
| 16 山の上1・2号墳 | 42 名子古墳 |
| 17 桃谷長者古墳 | 43 ザラザラ谷古墳 |
| 18 中村山1・2号墳 | 44 尾尻1号墳 |
| 19 向出山古墳群 | 45 香丸山古墳 |
| 20 吉河遺跡 | 46 櫛川遺跡 |
| 21 吉河古墳 | 47 松島遺跡 |
| 22 小谷ヶ岡1・2号墳 | 48 気比神社宮 |
| 23 坂ノ下遺跡 | A 本町 |
| 24 明神山古墳群 | B 長沢 |
| 25 岡山遺跡 | C 馬坂 |
| 26 志比前神社遺跡 | D 杵丸山古墳山麓 |

本墳は、4世紀末ないし5世紀初頭に築造した敦賀地域の首長墓である。

山の上1号墳は、井川東方の丘陵端に位置する。立洞2号墳と併行して緊急調査を実施した。本墳は直径約13.5mを測る円墳である。全長約6.6mを測る左片袖式の横穴式石室から、鉄刀2口、須恵器10個などが出土している。本墳は6世紀後葉の築造である。

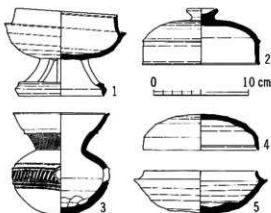
向出山古墳群（同図19）は、吉河東方の丘陵頂および山麓に位置する。本古墳群は、方形区画を有する円墳1基（1号墳）、円墳3基（2～4号墳）からなる。1954・67年（昭和29・42年）に石井氏らが1・3・4号墳の発掘調査を、1967年に森川昌和氏が1号墳の実測調査を、1983年（昭和58年）に敦賀市教育委員会社会教育課が土地造成に先立って2号墳の緊急調査を、さらに1984・85年（昭和59・60年）に福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが、埋戻し保存に備えて1・3号墳の石室の実測調査を実施した。

向出山1号墳は直径約60mを測り、平野に面して南北長約18m、東西長約12mの方形区画を有する。墳丘には段築・葺石をそなえる。埋葬施設は竈穴式石室2基である。1号石室は、長さ約4.4m、幅約2mを測り、仿製四神四獣鏡1面、仿製鏡1面、鉄地金銅装眉庇付冑1領、同頭甲1領、挂甲1領など多数の副葬品が出土している。2号石室は、長さ約2.6m、幅約1.3mを測り、仿製四神四獣鏡、横翅板鉾留衝角付冑1領、頭甲1領、三角板鉾留短甲1領などが出土している。なお、墳頂部から須恵器16個（第12図1・2）などが出土している。本墳は、5世紀後葉に築造した敦賀地域の首長墓である。

向出山2号墳は、直径約16mを測る円墳である。墳丘には葺石・埴輪をそなえる。長さ約4m、幅約0.75mを測る割竹形木棺から、竹櫛43個、滑石小玉約240個、鉄剣2口、盾1張、須恵器3



第11図 南方より見た向出山1号墳1号石室



第12図 敦賀市内出土遺物実測図（縮尺1/4）
（1・2 向出山1号墳、3 沓丸山古墳山麓、
4・5 天満神社古墳）



第13図 明神山古墳群分布図（縮尺1/3,000）

基が残存していることが判明していた。昨年から堂坂支群（12～16号墳）を福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが、一般国道8号線敦賀バイパス建設に先立って緊急調査を実施しており、あらたな古墳や土壌墓の存在が判明するとともに、あわせて、従来方墳かと見なしてきた古墳（12～15号墳）が円墳であることが判明した。

明神山古墳群は、古墳17基、土壌墓1基などかなり、それぞれの立地と分布状況から北・中央・南の3支群に分けうる。

北群（堂坂支群）は、円墳6基（12～19号墳、同図12～19）以上、土壌墓1基（同図D）からなる。調査未了のため概略だけを記せば、各古墳は直径約6.5～11mを測る。12・19号墳から土壌を、18号墳から横穴式石室を検出している。これらは一般的に副葬品に乏しいが、土壌墓から供献用

個などが出土している。本墳は5世紀中葉の築造である。

向出山3号墳は、直径約13mを測る円墳である。全長約7.7mを測る左片袖式の横穴式石室から、耳環3個、鉄刀3口、響2組、須恵器34個などが出土している。本墳は6世紀後葉の築造である。

向出山4号墳は、直径約7mを測る円墳である。横穴式石室内には土砂が堆積しており詳細は不明であるが、耳環1個、管玉2個、ガラス小玉4個、須恵器4個などが出土している。本墳も6世紀後葉の築造である。

小谷ヶ洞1・2号墳（第10図22）は、吉河南方の丘陵上に位置する。1955年（昭和30年）、敦賀市教育委員会社会教育課が、福井県原子力センター建設に先立って緊急調査を実施した⁴⁸。1号墳は一边約20mを測る方墳である。埋葬施設は木棺2基である。長さ4.7m、幅0.75mの割竹形木棺（第1主体）から施1本が、形態不詳の木棺（第2主体）から鉄剣1口、施1本が出土している。また、2号墳は直径約25mを測る円墳である。長さ3.7m、幅0.9mの割竹形木棺から乳文鏡1面、管玉1個、刀子1口が、墳頂部から土師器7個余りが出土している。この2基は、ともに4世紀後葉の築造であろう。

明神山古墳群（第13図）は、坂ノ下東方の丘陵上および山麓に位置する。本古墳群はこれまで総数16

の上師器2個が出土している。18号墳は6世紀中葉の築造であるが、そのほかの古墳は4世紀後半を中心とする築造であろう。

中央群は、前方後円墳1基（1号墳、同図1）、円墳5基（2～6号墳、同図2～6）からなる。1号墳は全長約47mを測る。墳丘には葺石をそなえとともに、後方部下に基台部を有する。かつて乱掘のさい、竪穴式石室の用材かと思える石材が確認されており、4世紀に築造した敦賀地域の首長墓であろう。3号墳は1号墳に南接し、直径約35mを測る円墳である。その他は直径10～14mを測る小円墳である。

南群は、前方後円墳1基（9号墳、同図9）、円墳4基（7・8・10・11号墳、同図7・8・10・11）以上からなる。9号墳は全長約20mを測る。横穴式石室をもっており、6世紀に築造した敦賀地域の首長墓であろう。その他の古墳は直径約10～15mを測る小円墳であるが、10・11号墳は横穴式石室をもち、7・8号墳は須恵器片が出土している。よって、本群はいずれも6・7世紀の築造になるものである。

そのほか、笙ノ川を挟んで明神山古墳群の対岸には、宮山古墳群（同図27）や堂古墳群（同図28）が分布する。前者は孤立丘上に位置し、直径（一辺）約9～19mを測る円墳4基、方墳1基からなる。立地や外形観察から5世紀の古墳が中心をなすのではないかと思える。後者は山麓に分布し、直径約7～19mの円墳14基からなる。群内の多数の古墳が横穴式石室をもつので、6・7世紀の古墳が中心をなすものと思える。

また、平野西部の北端の山麓には楢川山古墳群（同図41）が位置する。本古墳群は3基の小円墳からなる。そのうち1号墳（穴地蔵古墳）は、直径約11mを測り、石室を有する横穴式石室をもつ。他の2基の古墳とともに6・7世紀の築造であろう。

さらに、敦賀半島においては、観音に2基の古墳が分布する。そのうち尾尻1号墳（同図44）は扇状地上に位置し、1984年（昭和59年）、敦賀市教育委員会社会教育課が園地整備に先立って緊急調査を実施した。墳丘は既に破壊されていたが、横穴式石室をもち、6世紀後半の築造であろう。

奈良・平安時代の遺跡としては楢川遺跡（同図46）、薬原古窯跡群（同図2）、深山寺経塚群（同図12）、高野遺跡（同図15）などが確認できている。

楢川遺跡は松原浜堤の西端に位置する。1979年（昭和54年）、渤海使に係る松原客院敷定地として、福井県教育庁文化課が発掘調査を実施した。客院に関連する遺構は発見できず、かわりに製塩炉が検出できたのみであるが、小型儀鏡1面、銅銭8枚、銅鈴1個と須恵器など多彩な遺物が出土している。製塩炉は古墳時代後期に遡るが、平安時代前期を中心とする遺跡である。

薬原古窯跡群は、薬原北方の南山麓に位置する。1980年（昭和55年）、敦賀市教育委員会社会教育課が園地整備事業に伴って3基の窯跡の灰原を試掘した。杯、皿、蓋、甕など多数の平安時代中期の須恵器には、風字硯が記される。

深山寺経塚群は、深山寺に西接する丘陵地に位置する。本経塚群は20余基からなるという。早く



第14図 深山寺経塚群出土鏡実測図
(縮尺1/2)

経巻19巻、経筒2筒⁹⁴、銅鏡2面⁹⁵(第14図)などが出土している。1982年(昭和57年)、敦賀市教育委員会教育課が、宅地造成に先立って1～7号経塚の緊急調査を実施した。その結果、1号経塚からは、銅鏡11面、金銅鈴1個、銅銭1枚、青白磁小皿1個、白磁小皿1個などが出土した。また、3号経塚からは、銅鏡14面、青白磁小皿2個、白磁碗2個などが、その他の経塚からも骨器などが出土した。本経塚群は平安時代末期に構築を開始し、室町時代まで造営を継続したものである⁹⁶。

なお、単独の遺物出土地であるが、本町(第10図A)から奈良時代の須恵器1個が出土している。

鎌倉・室町時代の主たる遺跡には城砦跡の確認例が多い。主なもののみあげれば、南北朝・室町時代の例として天筒山の北西端に位置する金ヶ崎城跡(同図7)、室町時代の例として足田南方の段丘上に位置する足壇城跡(同図31)などがある。また、1982年堅曲に東接する丘陵上の堂山砦跡(同図9)を新たに発見した。

以上が敦賀地域に所在する主要な遺跡である。第10図でも明白なことであるが、これらの遺跡のうち大部分は、井川から堂にかけての東部地区に集中している。とりわけ、古代の首長層の動勢が端的に現われているといえる大型古墳(首長墓)は、いずれも東部山麓地帯に集中している。

そこで改めて南・西部地区を眺めてみると、南部では黒河川の扇状地が発達しており、古墳時代後期に至ってようやく天満神社古墳(同図35、第12図4・5)、黒河1・2号墳など若干の古墳が出現する。また西部では、芥見・原周辺などに低湿地が多い。すなわち、古代の敦賀地域においては南・西部では遅くまで耕地化が困難であり、それに比べて東部は比較的早くから開けていたことが推測できる。その東部山麓地帯の中央部に位置するのがまさに古河遺跡である。

注

- ① 福井県教育委員会『北陸自動車道関係遺跡調査報告書』第14集、1980年。
- ② 浜堤は、風成砂により形成された砂丘と異なり、砂が磯浪の作用で打ち上げられ形成されたものであり、富山県放生津砂丘、石川県羽咋砂丘を類例に挙げる。
- ③ 森川昌和「白木浦」(『福井県の地名』1981年)。
- ④ 福井県教育委員会『北陸自動車道関係遺跡調査報告書』第13集、1978年。
- ⑤ 注④に同じ。

- ⑥ 広嶋一良 「松原遺跡」(『福井県における弥生式土器集成』福井考古学研究会、1970年)。なお、本文献では松原遺跡と称されているが、松原地区内には多くの遺跡が所在しているので、ここでは改称した。
- ⑦ 福井県教育委員会「北陸自動車道関係遺跡調査報告書」第14集、1980年。
- ⑧ 前田 優氏1985年採集品。敦賀市域での遺跡の分布調査は、なおきわめて遅れている。それは特に集落遺跡において顕著である。そのため、本節では単独遺物出土地なども取りあげて、若干でもその欠を補うことにした。なお、一部の遺跡の所在については、山口 充氏の教示を得た。
- ⑨ 私立敦賀博物館(石井左近氏)蔵品。
- ⑩ 石井左近『敦賀市通史』1956年。
- ⑪ 梅原末治「統越前敦賀郡の遺物と遺跡」(『考古学雑誌』第7巻第1号、1918年)。
- ⑫ 石井左近「向出山古墳出土品」(『敦賀市文化財』第2集、1960年)。
- ⑬ 森川昌和「向出山古墳をめぐって」(『別冊 気比史学』第2号、1981年)。
- ⑭ 本墳の山十品については異説が多いので、1978年注④文献で改めて報告した。ただし、今回の実測時に、須恵器のほか多数の玉類を採集している。なお、1号石室出土の鉄地金銅装眉庇付冑は2領復原されているが、うち1領は問題を残すので除外する。
- ⑮ 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター「吉河遺跡調査ニュース4」1983年。
- ⑯ 注④に同じ。
- ⑰ 注④に同じ。
- ⑱ 森川昌和「敦賀の開発と発展」(『敦賀市史』通史編上巻、1985年)。
- ⑲ 明神山4～6号墳については、これまで方墳と報告してきた。しかし、今回の調査で、これまでやはり方墳としてきた堂坂支群(北群)が、いずれも円墳であることが判明したため、変更した。福井県教育庁埋蔵文化財調査センター「吉河遺跡」1983年。
- ⑳ 山口 充氏の教示による。
- ㉑ 注⑩文献によれば、山麓の常宮神社周辺には、かつて数基の古墳が存在していたことを記している。
- ㉒ 斎藤 優「穴地藏古墳」(『文化財調査報告(福井県)』第27集、1979年)。
- ㉓ 一般には松原遺跡と称されている。注⑥と同様な理由で、ここでは改称した。調査結果については、山口 充氏の教示による。
- ㉔ 京都大学文学部「京都大学文学部博物館 考古学資料目録」第2部 日本歴史時代、1968年。
- ㉕ 私立敦賀博物館(石井左近氏)蔵品。図化を許可された石井氏に謝意を表したい。
- ㉖ 前田 優「深山寺経塚群」(『昭和57年度発掘調査報告会資料』福井考古学会・若狭考古学研究会、1983年)。

Ⅲ 遺 構

1 遺構序説

吉河遺跡の調査では、きわめて多数の遺構を検出した。遺跡は、2条の自然流路に面された舌状台地内を中心に展開しており、北部の住居域と南部の墓域で構成される。このうち住居域は、南北長約110m、東西幅約50mを測る。検出遺構には、竪穴住居、掘立柱建物、土壇、溝、柱穴などがあり、その遺構密度はきわめて高い。これに対し墓域は、南北長約100m、東西幅約50mを測り、その北端部は住居域と重複する。検出遺構には、方形周溝墓、土壇墓などがあり、住居域に比べ遺構の重複が少ない。墓域内は、その面積の大半を方形周溝墓が、その北端部を上壇墓群が占めている。また墓域中央には、南北に縦走する墓道が存在する。すなわち本遺跡は、きわめてコンパクトな弥生集落遺跡といえることができる。

今回の報告では、紙面の都合上全遺構について言及することを避け、主要な遺構についてのみ説明を加える。なお各方形周溝墓の詳細については、一覧表を付したので参照されたい。また前回報告した各遺構番号のうち、その一部については変更しているので注意されたい。

主要な検出遺構の数は次の通りであり、いずれも弥生時代中・後期に属する。

- | | | |
|---------------|--------------------------|-------------|
| (1) 竪穴住居 6棟 | (2) 掘立柱建物 8棟 | (3) 土壇 345基 |
| (4) 溝 109条 | (5) 墓道 6条（「幹道」1条、「枝道」5条） | |
| (6) 方形周溝墓 25基 | (7) 土壇墓 11基 | |

2 遺構各説

A 竪穴住居（第16～第18図、図版第5～第7）

竪穴住居は住居域に散在し、6棟を数える。規模には大型と小型が、平面形には円形と隅丸方形のそれぞれ2種がある。

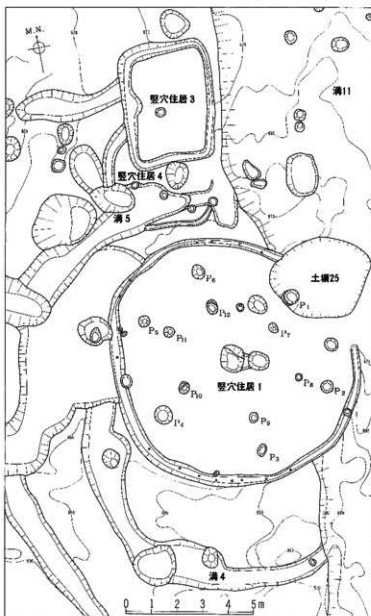
竪穴住居 1 住居域の南東部、H12区に存在し、東部で溝11、土壇25と重複する。平面形が円形を呈する大型住居で、規模は東西径約9.8m、南北径約9.5mを測る。壁高は約15cmを測る。壁に沿って幅約20～40cm、深さ約7cmを測る壁溝が巡る。東部の重複部分では壁溝が欠くが、本来は全周していたと思える。また壁溝内には、径約10cmを測る小穴が不規則にならぶ。住居中央部には、埋土に炭化物を多く含む土壇が存在するが、明確な炉は存在しない。柱穴は、等間隔にならび、径約50～80cm、深さ約17～30cmを測る主柱穴6本（P₁～P₆）と、その内側にならび、径約30～60cm、深さ約10～20cmを測る支柱穴6本（P₇～P₁₂）を数える。住居の南・北外周に巡る溝4・5は、本住居に伴う排水用の溝（外周溝）の可能性が高い。主要な出土品には、土器3個、石小刀1個、砥石2個、軽石2個がある。本住居は後期である。

竪穴住居 2 住居域南部、F11区に存在する。平面形が円形を呈する小型住居で、規模は東西径約5.5m、南北径約5.9mを測る。壁高は約15cmを測る。壁に沿って幅約20～60cm、深さ約10cmを測る壁溝が巡るが、北部には存在しない。また壁溝は南部で拡張され、出入口施設の可能性を

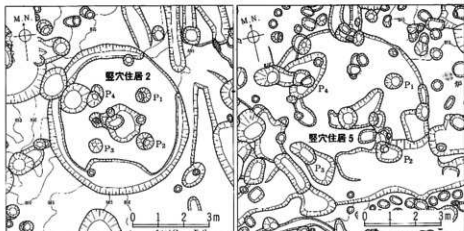
もつ。住居中央部には、埋土上層に炭化物を多く含む土壌が存在するが、明確なものは存在しない。主柱穴は4本($P_1 \sim P_4$)を数え、径約50~90cm、深さ約35~45cmを測る。また $P_1 \cdot P_2 \cdot P_4$ は、各2本ずつが重複する。主要な出土品には、土器3個、打製石鏃1個、磨製石鏃未成品1個、メノウフレイク1個がある。本住居は後期である。

竪穴住居 3 住居域の南東部、H11区に存在し、竪穴住居4と重複する。平面形が隅丸長方形を呈する小型住居で、規模は東西長約3.5m、南北長約4.7mを測る。壁高は約12cmを測る。壁に沿って幅約20~50cm、深さ約10cmを測る壁溝が全周する。また壁溝は、両辺中央で若干内側へ張り出している。炉は存在しない。住居中央部西寄りに径約40cm、深さ約10cmを測るピット1個が存在する。主要な出土品は、土器片多数、土下1個がある。本住居は後期である。

竪穴住居 4 住居域の南東部、H11・12区に存在し、北部で竪穴住居3と、南部で溝5などと重複する。そのため、規模・平面形の詳細には不明点が多い。平面形が隅丸長方形を呈する小型住居で、規模は東西長約4.8m、南北長約4.3mを測る。壁高は約18cmを測る。壁に沿って幅約20~40cm、深さ約10cmを測る壁溝が通る。本住居は、出土遺物が少なく時期は未詳であるが、平面



第16図 吉河遺跡竪穴住居1・3・4 実測図 (縮尺1/150)

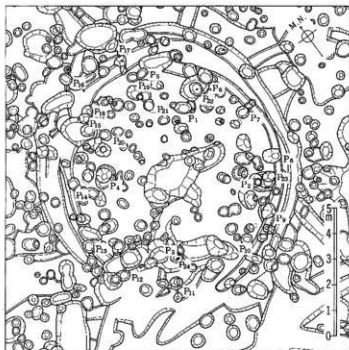


第17図 吉河遺跡竪穴住居 2・5 実測図 (縮尺1/150)

形から後期である可能性が強い。

竪穴住居 5 住居域の東部、G 7 区に存在し、溝47のほか、多数

の土壌・柱穴が重複している。平面形は円形を呈し、規模は東西径約 7 m、南北径約 7 m を測る。壁高は約 10 cm を測る。壁溝は、東縁においてきわめて部分的に存在し、長さ約 80 cm、幅約 30～55 cm、深さ約 15 cm を測る。住居中央部には、不整形の土壌が存在するが、明確な炉は存在しない。ちなみに、本住居に東接して屋外炉が存在する。主柱穴は 4 本 (P1～P4) を数え、径約 70～100 cm、深さ約 35～40 cm を測る。主要な出土品には、土器 4 個、打製石鏃 1 個、石錐 2 個、不定形刃器 2 個、砥石 2 個がある。本住居は後期である。



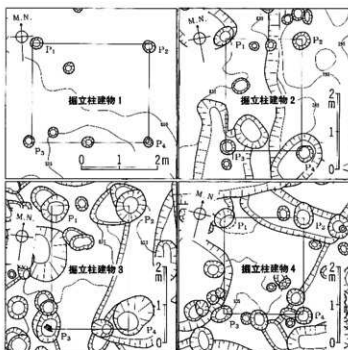
第18図 吉河遺跡竪穴住居 6 実測図 (縮尺1/150)

竪穴住居 6 住居域の東部、F 5 区に存在し、多数の土壌・溝

・柱穴と重複する。平面形は円形を呈する大型住居である。本住居は、2 回の拡張が行なわれ、最終規模は東西径約 10.1 m、南北径約 11.2 m を測る。壁高は約 10 cm を測る。壁に沿って幅約 30～70 cm、深さ約 10 cm の壁溝が巡る。拡張のため、壁溝は 3 条が存在する。最初は同心円状に、次は北方にそれぞれ拡張する。主柱穴は、当初 P1～P4 (径約 40～70 cm、深さ約 30～50 cm) の 4 本柱で

あり、最終的には、壁溝に近接した位置に存在する $P_3 \sim P_{15}$ (径約40~70cm、深さ約10~50cm)の11本柱となる可能性がある。

また柱穴のうち $P_{16} \sim P_{21}$ (径約48~56cm、深さ約15~50cm)は、本住居に伴う出入口部施設の可能性をもつ。なお $P_{22} \sim P_{24}$ には、柱根が遺存する。住居中央部には、埋土に炭化物を多く含む不整形の土壌が存在するが、明確なものは存在しない。主要な出土品には、打製石鏃12個、石砲丁2個、太型蛤刃石斧3個、柱状片刃石斧1個、扁平片刃石斧1個、石錐1個、不定形刃器10個、砥石1個、軽石1個、管玉未成品4個、碧玉17個、玉錐1個、玉鋸10個がある。このうち、玉作りに関連する管玉未成品2個、碧玉5個、玉鋸3個は、住居中央部の土壌から出土している。本住居は玉作り工房である可能性が強い。本住居は中期と考える。



第19図 吉河遺構掘立柱建物1~4実測図 (縮尺1/100)

玉鋸10個がある。このうち、玉作りに関連する管玉未成品2個、碧玉5個、玉鋸3個は、住居中央部の土壌から出土している。本住居は玉作り工房である可能性が強い。本住居は中期と考える。

B 掘立柱建物 (第19・第20図、図版第7(2)~第10)

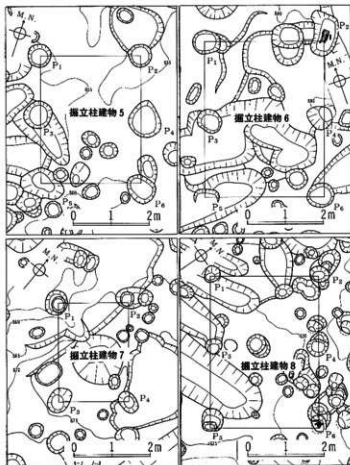
掘立柱建物は主に住居域に散在し、8棟を数える。これらの建物には、1間×1間と1間×2間の2種があり、前者は5棟(掘立柱建物1~4・7)、後者は3棟(同5・6・8)を数える。

掘立柱建物1 溝16の東方、K2区に存在する。 $P_1 \sim P_4$ で構成する東西方向の建物である。桁行約3.1m、梁行約2.5m、柱穴の径約0.27~0.35m、深さ約0.23~0.36mを測る。本建物は後期である。

掘立柱建物2 住居域の東端部、G5・6区に存在する。 $P_1 \sim P_4$ で構成する南北方向の建物である。桁行約3.0m、梁行約2.0m、柱穴の径約0.38~0.6m、深さ約0.55~0.7mを測る。 P_2 には柱根が、 P_3 には根じめ石と思える河原石1個が遺存する。本建物は後期である。

掘立柱建物3 住居域南部、E・F9区に存在する。 $P_1 \sim P_4$ で構成する南北方向の建物である。桁行約3.2m、梁行約2.1m、柱穴の径約0.75~1.12m、深さ約0.55~0.7mを測る。 P_3 には柱根が遺存する。本建物は中期である。

掘立柱建物4 住居域南部、E10区に存在する。 $P_1 \sim P_4$ で構成する南北方向の建物である。桁行約2.6m、梁行約2.1m、柱穴の径約0.48~0.8m、深さ約0.25~0.5mを測る。時期は未詳である。



第20図 吉河遺跡掘立柱建物5～8実測図（縮尺1/100）

掘立柱建物5 住居域の東端部、G・H8区に存在する。P₁～P₅で構成する南北方向の建物である。桁行約3.4m、梁行約2.6m、柱穴の径約0.6～1.16m、深さ約0.35～0.5mを測る。時期は未詳である。

掘立柱建物6 住居域の東部、G7・8区に存在する。P₁～P₆で構成する南北方向の建物である。桁行約4.2m、梁行約3.2m、柱穴の径約0.65～1.1m、深さ約0.45～0.65mを測る。P₅には礎板が遺存する。時期は未詳である。

掘立柱建物7 住居域の南東部、G・H10区に存在する。P₁～P₄で構成する南北方向の建物である。桁行約2.7m、梁行約1.9m、柱穴の径約0.4～0.7m、深さ約0.4～0.55mを測る。時期は未詳である。

掘立柱建物8 住居域中央部、

E8区に存在する。P₁～P₆で構成する東西方向の建物である。桁行約4m、梁行約2.7m、柱穴の径約0.36～0.56m、深さ約0.45～0.55mを測る。P₆では小板材など木片数個が出土している。時期は未詳である。

C 土 壌

土壌は、住居域を中心に調査区全域に分布し、345基を数える。その規模や平面形には種々がある。ここでは、このうち主要な例についてのみに記す。

土壌153 住居域南部、F10区に存在する。平面形は不整楕円形を呈し、東西径約2.2m、南北径約0.9m、深さ約0.3mを測る。埋土下層から土器片（岩滑式）若干が、同上層から鶏形土製品（第29図1、図版第22(2)、口絵(2)）1個が出土している。本土壌は中期である。

土壌305 住居域北東部、F5区に存在する。平面形は不整形を呈し、東西約2.1m、南北径約1.6m、深さ約0.2mを測る。なお、埋土上層から磨製石剣（第27図27、口絵(2)）1個が出

上している。時期は未詳である。

土壌 306 住居域北東部、F 4 区において、土壌 305 に西接して存在する。平面形は長楕円形を呈し、南北長約 5.4 m、最大幅約 1.3 m、深さ約 0.3 m を測る。壙内北部から、壺をはじめとする土器数個が出土している。ちなみに、そのうち壺 2 個は、絵画文土器（第 26 図 20・21、図版第 19）である。本土壌は中期である。

D 溝（図版第 11・第 12 1）

溝には、旧河道に相当する自然流路と人工の流路とがあり、前者は 9 条、後者は 102 条を数える。ここでは、前者についてのみ記すことにする。

自然流路は、主に村の東端をなす流路（溝 11・16）と村の西端をなす流路（同 3・106）とに分けられる。前者は、墓域や住居域に東接して北流し、北部で急に幅がせばまり、弧を描いて彎曲する 1 条の流路である。途中数条のより小さな流路が合流する。なおここでは、便宜上溝 11、同 16 の 2 名に分けて記す。一方後者は、墓域に西接して西流する幅の狭い溝 3 と、北流する幅の広い溝 106 からなるが、両者が同一の流路かどうかは不明である。これらの流路のうち、溝 11 は、中期には存在していたことが判明している。

溝 3 墓域南部に西接して西流し、B 18 区付近で溝 106 に合流する。幅約 4～7 m、深さ約 0.1～0.4 m を測り、長さ約 30 m を検出した。出土品はきわめて少ない。

溝 11 墓域や住居域に東接して北流し、溝 16 に続く。幅約 5～8 m、深さ約 0.3～0.4 m を測り、長さ約 130 m を検出した。主要な出土品は、土器、打製石鏃、石廬丁、太型蛤刃石斧、扁平片刃石斧、砥石など多数を数える。特に本溝の下流、G・H 5～7 区では、中期の土器（第 24 図 1・2・4・5・11）が集中して出土している。

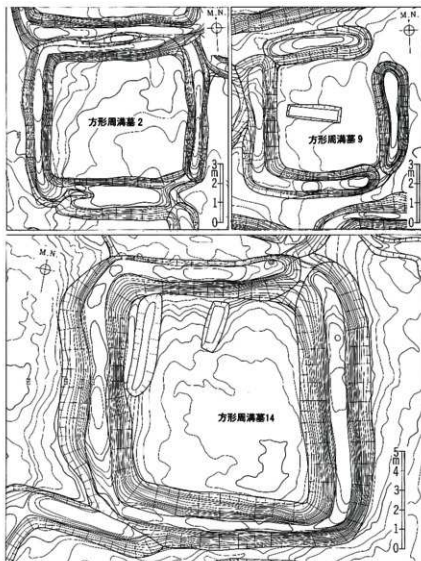
溝 16 住居域北東端部を、弧を描いて西流する。幅約 1.8～6.4 m、深さ約 0.2～0.4 m を測り、長さ約 40 m を検出した。主要な出土品は、土器、磨製石剣、石廬丁、太型蛤刃石斧、砥石、管玉、碧玉、石鋸、銅鏃、木器など多数を数える。特に、本溝出土木器は約 900 個を数え、古河遺跡出土木器の大部分を占める。木器は、本溝の彎曲部分、H・1 2～4 区に集中して出土している。これらの木器のなかには、蓋、槽、鏃なども含まれる。出土品は、その大部分が後期である。

溝 106 溝 3 と合流後、墓域に西接しゆるやかな弧を描いて北流する。幅約 10～13 m、深さ約 0.3～0.4 m を測り、長さ約 40 m を検出した。出土品は、打製石鏃、太型蛤刃石斧、砥石、碧玉など若干を数える。

E 墓道（図版第 12 2）

墓道は、墓域の中央を南北に走る「幹道」1 条と、これから分岐して群島の方形周溝墓に至る、より幅の狭い「枝道」5 条からなる。これらの墓道は、各方形周溝墓の陸橋部に接続する。このことから、本遺跡では遺休を集落から幹道（枝道）—陸橋部を経て墓に運んだことが想定できる。

幹道 全長約 70 m、幅約 1.4～9 m を測る。本道は、陸橋部を介して 9 基の方形周溝墓（方形周



第21図 吉河遺跡方形周溝墓2・9・14実測図 (縮尺1/200)

溝墓1・3・6・7・9・10・14・18・20)と接続する。

枝道A 方形周溝墓9の北溝に外接し、同13に至る。長さ約9m、幅約0.5mを測る。

枝道B 方形周溝墓5の北溝に外接し、同15の台状部東辺を経て、同17・18に接続し、同21に至る。長さ約22m、幅約0.6mを測る。

枝道C 方形周溝墓18の台状部南辺を経て、同21に至る。長さ約8.5m、幅約0.7mを測る。

枝道D 方形周溝墓16を経て、同12に至る。長さ約8.5m、幅約1mを測る。

枝道E 方形周溝墓23・22に接続し、同4に至る。長さ約50m、幅約0.7mを測る。

F 方形周溝墓 (第21・第22図、図版第13～第15)

方形周溝墓は、墓域の中央部～南部に位置し、25基を数える。これらは、幹道を挟んで、主に東群(10基)と西群(14基)とに分かれる。さらに、枝道の介在、方形周溝墓の分布状態、方形周溝墓の規模の違いなどによって、4～5単位群に分けうる。またこれらの単位群のなかで、構築の先後関係の明確な例を列挙すれば、方形周溝墓1→同2、同14→同17、同8→同18、同20→同24、同22→同11・13となる。個々の方形周溝墓の詳細については、第1表に記す。

方形周溝墓の規模には、一辺が約4.4 mを測る小型の例（方形周溝墓21）から、一辺が約12.5mを測る大型の例（同14）までがある。四周に溝を巡らす例（7基）と、陸橋部を残す例（17基）とに分れる。後者の例では、方形周溝墓ごとに陸橋部の数が1～3ヵ所と多様である。また数例を除いて、陸橋部を住居域寄りに設けている。埋葬施設には、台状部の墓壇と溝内の壺棺とがある。墓壇は、4基（方形周溝墓3・9・13・14）で各1基ずつ検出している。個々の詳細は文末に記す。このうち方形周溝墓3の例では、木棺の使用が明らかであり、同9・14の例でも、



第22図 吉河遺跡方形周溝墓
21実測図（縮尺1/200）

形状から木棺を使用したと考えうる。また、方形周溝墓3の例では、粘土塊が存在し、埋葬に使用したと思える。壺棺は、方形周溝墓10東溝と同20西溝に、各1個ずつ存在する。前者の例は、破砕した状態で出土している。一方後者の例は、溝底に横たえており、口縁部を3個の縁で閉塞している。なお、出土品のうち供獻土器は、大部分の方形周溝墓において、それぞれ1～6個を数える。

方形周溝墓は、23基（方形周溝墓1～3・5～24）が中期、2基（同4・25）が後期である。以下、墓壇について記す。

方形周溝墓3では、台状部の北東部に存在する。平面形は、長軸が東西を指す長方形を呈し、東西長約2.65m、南北幅約0.95m、深さ約0.2 mを測る。壇底の東端には、木口板を埋設する掘方が存在する。壇内から、小型管玉1個が出土している。

方形周溝墓9では、台状部の西部に存在する。平面形は、長軸が東西を指す長方形を呈し、東西長約2.75m、南北幅約0.8 m、深さ約0.4 mを測る。壇内西部の埋土中層から、供獻土器2個が出土している。

方形周溝墓13では、台状部の南西部に存在する。平面形は隅丸方形を呈し、東西長約1.2m、南北長約1.05m、深さ約0.2mを測る。壇底には、粘土塊が存在する。

方形周溝墓14では、台状部の北部に存在する。平面形は、長軸が南北を指す長方形を呈し、南北長約2.35m、東西幅約1.05m、深さ約0.7 mを測る。壇底から骨片が出土している。

第1表 吉河遺跡方形周溝墓一覧表

番 号	規 模 (m)		出 上 遺 物	備 考 (ゴシックは複数の陸橋部のうち最も北たる部分)
	東 西	南 北		
1	9.2	8.3	供獻土器1、管玉1、石鏃1、石短丁1、砥石1	陸橋部1（北西）
2	7.3	7.8	砥石2	・図版第13-1
3	8.1	6.8	管玉1、石鏃2	墓壇1、陸橋部1（北西）・図版第13-2
4	7.4	6.0	供獻土器1	陸橋部1（南東）
5	5.8	6.1	管玉1、石短丁1	
6	6.0	6.1	石鏃1、石斧1、砥石1	陸橋部2（南西・北東）
7	12.5	10.3	供獻土器6、石鏃2、石短丁2、石斧1、石鏃1、砥石2	陸橋部1（北東）

III 遺構

8	5.6	5.5		陸橋部1(北西)
9	6.5	6.9	供献土器3、勾玉1	墓壇1、陸橋部3(北東・北西・南東)・図版第14-(1)
10	7.3	7.7	蓋棺1、供献土器1	陸橋部1(北西)
11	6.4	10.6	供献土器3	
12	4.2	5.5	供献土器2、石鏡1、紡錘車1	陸橋部1(南西)
13	9.0	7.5	供献土器3、石燈丁1、砥石1	墓壇1、陸橋部1(北東)・図版第14-(2)
14	11.5	12.5	骨片、供献土器2、砥石2	墓壇1、陸橋部1(北東)・" - "
15	8.5	7.6	供献土器3、石鏡2、石燈丁2	陸橋部2(北東・南東)
16	6.7	6.8	供献土器2	
17	7.8	5.8	供献土器2、石鏡1	陸橋部1(北東)
18	5.9	5.5	供献土器1	陸橋部3(北西・南東・南西)・図版第15-(1)
19	7.0	5.7	供献土器4、石燈丁1	
20	9.7	12.0	蓋棺1、供献土器2	陸橋部1(北東)
21	4.4	4.8		陸橋部1(北東)
22	6.2	6.6	供献土器2	陸橋部1(南東)
23	8.2	7.0	供献土器3	陸橋部2(北東・南東)
24	8.0	8.0	供献土器3	
25	(8.2)			

G 土墳墓(第23図、図版第16)

土墳墓は、主に墓域の北部に位置し、11基を数える。これらは、大きく東群4基(土墳18・128・138・168)と、西群5基(同76・80・81・88・236)とに分けうる。なお、それらの形状からみて、いずれも木棺を使用した形跡に乏しい。

土墳4 墓域南部、E20区において、方形周溝墓24に西接して存在する。平面形は、長軸が南北を指す楕円形を呈し、南北径約2.5m、東西径約1.5m、深さ約0.45mを測る。時期は未詳である。

土墳18 墓域北東部、F12区に存在する。平面形は、長軸が東西を指す隅丸長方形を呈し、東西長約3.1m、南北幅約1.8m、深さ約0.75mを測る。墳底の東端には、枕に使用したと思われる、径約21cmの河原石1個と、径約9～17cmを測る河原石3個が存在する。主要な出土品には、骨片、供献土器1個、打製石鏡1個などがある。本土墳は中期である。

土墳76 墓域北西部、D11・12区において、方形周溝墓7に北接して存在する。本遺跡最大の土墳墓である。平面形は、長軸が東西を指す隅丸長方形を呈し、東西長約4.9m、南北幅約2.5m、深さ約1.35mを測る。墳底中央部は2段掘りになっている。この部分には、平らな自然石と河原石各1個が存在する。主要な出土品には、供献土器2個(第25図12、図版第18)がある。本土墳墓は後期である。

土墳80 墓域北西部、E11区に存在する。平面形は、長軸が南北を指す長円形を呈し、南北径約2.3m、東西径約0.7m、深さ約0.3mを測る。墳底北端では、枕に使用したと思われる半截土器

が出土している。時期は未詳である。

土壌81 墓域北西部、F11区に存在する。平面形は、長軸が南北を指す長円形を呈し、南北径約2.5m、東西径約0.8m、深さ約0.2mを測る。時期は未詳である。

土壌88 墓域北西部、E10区に存在する。平面形は、長軸が南北を指す長円形を呈し、南北径約2.6m、東西径約0.8m、深さ約0.2mを測る。時期は未詳である。

土壌128 墓域北東部、G11区に存在する。平面形は、長軸が南北を指す隅丸長方形を呈し、南北長約2.2m、東西幅約1.05m、深さ約0.25mを測る。時期は未詳である。

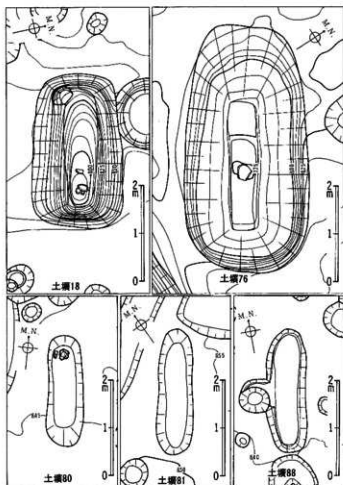
土壌138 墓域北東部、G10区に存在する。平面形は、長軸が東西を指す隅丸長方形を呈し、東西長約2.5m、南北幅約1.4

m、深さ約0.3mを測る。東端の埋土上層で、粘土塊を検出している。主要な出土品には、骨片、土器数片、石灯り3個、砥石1個がある。時期は未詳である。

土壌168 墓域北東部、G11区において、土壌128に東接して存在する。平面形は、長軸が南北を指す隅丸長方形を呈し、南北長約2.65m、東西幅約0.7m、深さ約0.1mを測る。時期は未詳である。

土壌236 墓域北西部、D11区に存在する。平面形は、長軸が東西を指す楕円形を呈し、東西径約2.0m、南北径約0.95m、深さ約0.25mを測る。時期は未詳である。

土壌351 住居域北東部、G・H3区に存在する。平面形は、長軸が東西を指す長円形を呈し、東西径約2.55m、南北径約0.75m、深さ約0.4mを測る。墳底は、東端を残して2段掘りになっている。墳底の西端から、半円形の板状土器が出土している。時期は未詳である。



第23図 吉河遺跡土壌18・76・80・81・88実測図 (縮尺1/80)

IV 遺 物

1 遺物序説

これまでの発掘調査における出土遺物は、コンテナバットにして約 830 箱を数える。そのほか、石器などが約 1200 個、木器が約 1000 個を数える。第 1～第 3 次調査においては比較的少なかった遺物量が、第 4、第 5 次調査で急増している。これは、前者が墓域を発掘対象地区としたのに対して、後者は住居域を発掘対象地区としたためである。

出土遺物は、その大部分を弥生土器が占める。そのほか、石器、土製品、石製品、玉類ならびに玉作り遺物、金属器、木器などがある。また、弥生時代以外の品として、ごく少量の縄文土器、土師器、須恵器、陶器、磁器、金属器（銅銭）、木器（船模型）なども存在する。しかし、本書は概報であり、弥生時代遺物のみの記述にとどめる。なお、既述のように、遺物の整理事業は現在も継続中である。したがって、各種の遺物の正確な実数は不明であって、加えて、我々調査員が発掘作業に専念せざるをえなかったため、詳細な実態を把握するに至っていない。その点きわめて遺憾である。

以下、各遺物について説明するが、紙幅の関係上復原・図化の終了した品のうち特徴的な一部の品のみ図示せざるを得なかった。すなわち、図示の品が必ずしも吉河遺跡出土の典型的な例とはいえない。例えば、土器を例にとれば、第 1～第 3 次調査時の出土品の主体をなす供献土器や、他地方からの搬入品あるいは他地方の影響を受けていると思える土器の図化作業が先行しているため、図示中では比較的多くなっている。また、図示数が少ないという不備を多少なりとも補う目的もあって、写真図版には図示以外の品をも収録している。ただし、木器を除き、基本的には、個別の遺物観察結果の報告については、図示の品にとどめる。なお、本書に掲載した品以外にも、『吉河遺跡調査ニュース 1』～『同 6』などで若干の品を報告しているので、参照されたい。

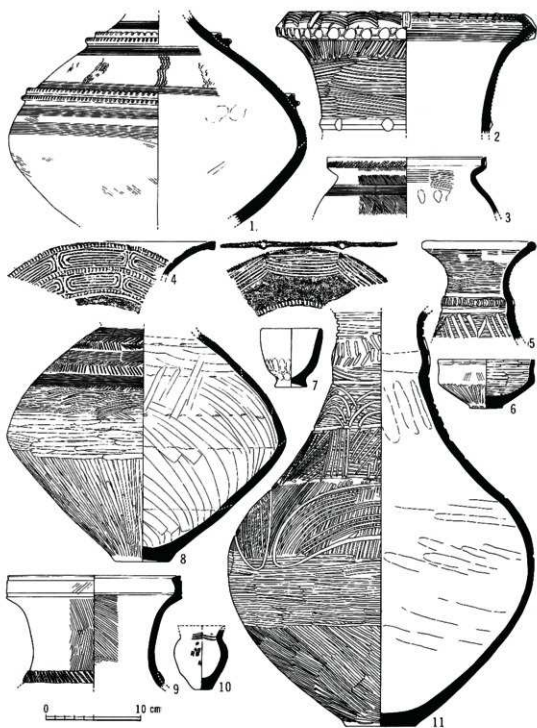
2 遺物各説

A 土 器（第 24・第 25 図、図版第 17～第 19）

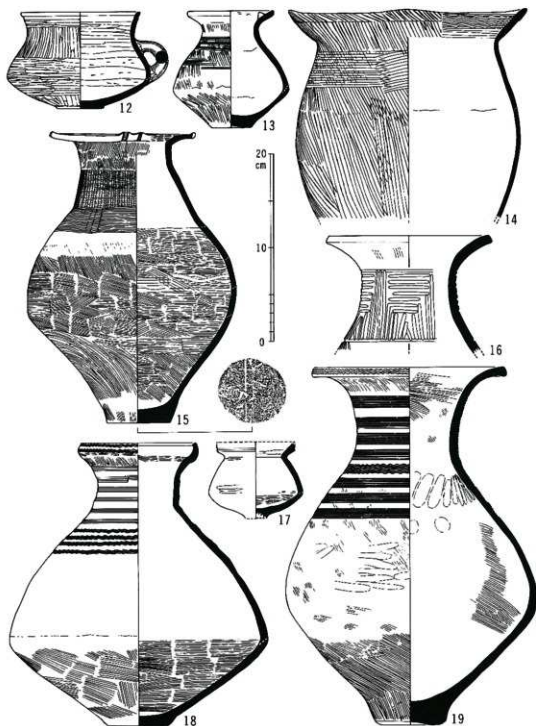
上述のように、土器量はきわめて多い。そのうち、住居域出土の土器（第 24 図）では竪穴住居と溝の出土品を、墓域出土の土器（第 25 図）では方形周溝墓と土壌墓の出土品を、それぞれ図示する。次に、特色を有する品についてのみ説明する^①。個別の詳細は観察表（第 2 表）を参照されたい。

まず、土器の所属時期については、Ⅱ様式からⅤ様式まで存在する。ただ、それらのうちの大部分がⅡ様式末ないしⅢ様式初めか、あるいはⅤ様式に属す。

1 はⅠ様式の様相をとどめる広口壺であるが、直線文をへうではなく櫛で描いている。2 は、



第24図 吉河遺跡出土土器実測図(1) (縮尺1/4)



第25圖 古河遺跡出土器実測圖(2) (縮尺1/4)

伊勢湾沿岸地方の岩滑式の広口壺である。同類の品は本例以外にも5個体分を数え、いずれも搬入品と思える。5・11も2と同様な条痕文土器であるが、細頸壺である。同類の品は、本例以外にも3個を数える。これらの品は、器形や文様構成の上で中部高地地方の阿島式土器に類縁性が指摘できるが、5・11は2と共作品というだけでなく、胎土・色調・調整などに共通点が多く、同じ伊勢湾沿岸地方からの搬入品であることを窺わせるに十分である。そこで、同地方でも木曾川流域の品の可能性を想定しておきたい。4もやはり伊勢湾沿岸地方の品であって、いわゆる大地式の広口壺である。口縁部の突起数は10個に復原できる。同類の品は、完形品1個(24)と小破片15個(25~28)を数える。24は、口縁端部の突起数が4個である。口縁部内面の文様帯はヘラ描し字状文と同直線文であるが、頸部外面の文様帯は櫛描直線文、胴部外面の文様帯は櫛描擬流水文であって、4・25~28よりやや新しい様相を呈する。3は、口縁端部がいわゆる受口状を呈する近江地方系の甕である。8は、伊勢湾沿岸地方の山中式の広口壺である。腹部が強く張り出し、最大径がやや高い位置にあるのが留意される。同様な点は他の土器でも散見しうること、例えば貝田町式の細頸壺1個(22)が存在するが、伊勢湾沿岸地方の品に比べ最大径はやや高い位置にある。

13は小型の広口壺である。口縁部内面には、近江地方から伊勢湾沿岸地方にかけてⅢ様式まで遺存する小突起3個を有する。14は波状口縁の甕であり、吉河遺跡のなかでも比較的類例が多い。こうした土器は近江地方に類品をみ、同地方の影響を受けたことは十分考えられることであるが、なお、整理・検討の進捗をまちたい。15は、頸部外面にくずれた櫛状文を施した広口壺である。本遺跡の出上品中には櫛状文は未検出である。なお、15の口縁部内面には工具刺突によるハ状の文様4個を施す。このような文様のみに限れば、本例以外にも1例が存在する。16は、頸部外面にいわゆるコの字重ね文を描いた壺である。同類の品は本例以外にも2個を数え、より全形の窺える例では頸部を横の沈線で3段に区切り、各段内に上からコの字重ね文、複合鋸歯文、連弧文を充填している。こうした土器も、やはり伊勢湾沿岸地方に類例をみることができる。

以上の土器のうち1はⅡ様式に、2・4・5・11・13~16・19・22~28はⅡ様式末ないしⅢ様式初めに、9はⅣ様式に、6・7・10・12・17はⅤ様式に比定できる。

第2表 吉河遺跡出土弥生土器観察表

図	番号	器形	法量 (cm・g)	形態の特徴	手法の特徴	胎土・質	色調	備考
24	1	広	腹径 31.1 器高 (21.8)	・外面の頸・胴部間を連続刺突文を施した2条1組のハ帯2段で3分し、各凸帯の上・下に櫛描直線文を施す。また中段には擬型流水文を施す。	・外面は斜めのハケ調整後、ヘラ磨きする。 ・内面はナデ仕上げする。	・砂粒を多く含む。 ・焼成やや不良。	・薄褐色	・口縁部・底部と体部の1/2を欠失する。 ・溝11出土。 ・図版第17—1

IV 遺物

			・体部はやや下ふくれである。				
2	口 甬	口径 27.7 器高 (12.8)	・口縁部は外面に線を形作り、内傾する。 ・口縁部内外面、同端面に貝殻による押し引きの直線文・放状文を施す。 ・口縁部外面に棒状浮文・綾線部・頸部に折頭正痕凸帯をめぐる。 ・頸部外面は貝殻条痕文を施す。	・頸部内面はナデ仕上げか。	・砂粒を多く含む。 ・焼成やや不良。	・暗茶褐色	・頸部より下部を欠失する。 ・溝11出土。 ・図版第17—2 ・溝11出土。 ・図版第17—1
3	壺	口径 16.5 器高 (6.1)	・口縁部は外面に弱い線を形作って直立し、受口状をなす。 ・口縁部外面に斜めの連続刺突文を施す。 ・肩部外面に櫛歯直線文を施す。	・口縁部内外面は横ナデ調整する。 ・体部外面は斜めのハケ調整、頸部内面は横のハケ調整する。	・砂粒をかなり多く含む。 ・焼成良好。	・薄褐色	・胴部より下部を欠失する。 ・壺穴作樹3出土。
4	広口 甬	口径 26.0 器高 (3.6)	・口縁部は上外方にゆるやかに外反する。 ・口縁端部の竹管文を施した小突起で10分割し、外面にヘラによる連弧文や連続刺突文を、内面に中間を楕円形文で充填した連続刺突文を施す。	・内外面とも横のていねいなへう磨きを施す。	・砂粒を若干含む。 ・焼成良好。	・黒褐色	・口縁部の一部のみ遺存。 ・溝11出土。 ・図版第19—4
5	細頸 甬	口径 11.9 器高 (10.3)	・口縁部は上外方にゆるやかに外反する。 ・外面の頸部は連続刺突文をはさんでへう磨き直線文を、それより下は複合鋸歯文を施す。	・外面は横の貝殻条痕文を施す。 ・内面はナデ仕上げる。	・砂粒を多く含む。 ・焼成良好。	・灰褐色	・肩部より下部を欠失する。 ・溝11出土。 ・図版第17—5
6	鉢	口径 10.0 底径 3.5 器高 5.1	・口縁部は直立する。 ・底部はやや突出する。	・内面と口縁部外面は横の、体部外面は縦のへう磨きをする。	・砂粒を若干含む。 ・焼成良好。	・淡茶褐色	・完形品である。 ・溝5出土。
7	ミナ ツチ ノ コ ノ コ ノ コ	口径 6.5 底径 3.4	・口縁部は上外方に内湾ぎみに立上る。	・内外面ともナデ仕上げる	・砂粒を多く含む。	・淡茶褐色	・完形品である。

2 遺物各説

7		器高 6.2	• ゆるやかにひろく低い白を有する。	が、体部外面下半に指頭圧痕がのこる。	• 焼成良好。		• 竪穴住居1出土。
8	広口	腹径 29.6 底径 5.7 器高 (24.6) 容量 7.3	• 肩部外面を櫛描直線文で3段に分け、各櫛描直線文下に羽状刺突文あるいは斜めの連続刺突文を施す。 • 体部中央で強く張り出す。 • 底部下向は上げ底になる。	• 外面は肩部・腹部で横のへう磨きをする。 • 内面は肩部で横の、それより下部で斜めのナデ仕上げする。 • 内面には5条の接合痕がのこる。	• 砂粒を若干含む。 • 焼成やや不良。	• 外面淡褐色、内面灰藍色	• 竪穴住居1出土。 • 図版第17-8
9	壺	口径 13.0 器高 (11.7)	• 口縁部は外面に稜を形作り、直立する。 • 口縁部外面の端部と稜線部に沿って各1条の凹線をめぐらす。 • 頸部外面の屈曲部に連続刺突文を有する凸帯をめぐらす。	• 口縁部は内外面とも横ナデ調整する。 • 頸部の外面は縦の、内面は斜めのハケ調整する。	• 砂粒を多く含む。 • 焼成不良。	• 外面黄褐色、内面暗灰色	• 肩部より下部を欠失する。 • F9 包含層出土。
10	ミニチュア	腹径 5.7 底径 1.9 器高 (6.4)	• 口縁部は上外方に外反する。 • 頸部外面に羽状の線刻文を描く。	• 体部外面は縦のハケ調整する。	• 砂粒を多く含む。 • 焼成やや不良。	• 黄褐色	• 口縁端部を欠失する。 • G10 包含層出土。
11	細頸壺	腹径 32.0 底径 7.2 器高 (44.2) 容量 11.8	• 頸部外面にへうによる直線文で3分し、上から羽状文・連弧文・複合鋸歯文を充填し、その下の貝殻条痕による連弧文を偏円形に囲む。	• 外面は頸部・腹部で横の、肩部・腹部で斜めの貝殻条痕文を施す。 • 内面の頸部は縦の、体部は横のナデ仕上げする。	• 砂粒を多く含む。 • 焼成やや不良。	• 暗茶褐色	• 口縁部を欠失する。 • 溝11出土。 • 図版第17-11
25	12	口径 12.5 腹径 15.1 底径 4.8 器高 10.1 容量 0.8	• 口縁部は上外方にゆるく立ち上がる。 • 口縁端部に沈線1条をめぐらす。 • 体部に半環状のつまみ1個がつく。	• 外面は口縁部・腹部で横の、頸部・腹部で縦のへう磨きする。 • 内面は口・頸部で横のへう磨き、腹部で横のへう割り	• 砂粒を若干含む。 • 焼成やや不良。	• 淡褐色	• 完形品である。 • 土壌76出土。 • 図版第18-12

Ⅳ 遺 物

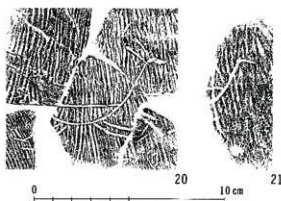
				する。			
13	広口壺	口径 8.9 腹径 12.0 底径 4.2 器高 12.2	- 口縁部は上外方にゆるやかに外反する。 - 口縁部内面に瘤状突起3個を貼りつけている。 - 肩部外面に櫛描き直線文3条を施す。	- 外面は縦のハケ調整後、縦または斜めのヘラ磨きする。 - 内面はナデ仕上げる。 - 内外面に接合痕がこのころ。	- 砂粒を多く含む。 - 焼成やや良好。	淡灰褐色	- 完形品である。 - 方形周溝墓10（西溝）出土。 - 図版第18-13
14	甕	口径 24.8 腹径 23.3 器高 (21.9)	- 口縁部は上外方に外反し、波状口縁（突起4カ所）をなす。 - 口縁部内面に櫛描波状文、頸部外面に櫛描直線文を施す。	- 外面は縦または斜めのハケ調整する。 - 内面の口縁部は横のハケ調整し、体部は斜めのナデ仕上げる。	- 砂粒をきわめて多く含む。 - 焼成良好。	淡灰褐色	- 腹部より下部を欠失する。 - 方形周溝墓12（西溝）出土。 - 図版第18-14
15	広口	口径 15.0 腹径 21.7 底径 6.6 器高 30.4 容量 4.6	- 口縁部は上外方に強く外反し、2個一対の刺突文で円周を4分する。 - 口縁部内面には小状の刺突文を4個施す。 - 頸部外面は変化した雁状文とその直下に櫛描直線文を施す。	- 外面は口縁部から肩部までと腰部が縦の、腹部が横のハケ調整する。 - 内面は口縁部と体部が横のハケ調整、頸部がナデ仕上げる。 - 底部下面に木炭痕を有する。	- 砂粒を多く含む。 - 焼成やや良好。	茶褐色	- 完形品である。 - 方形周溝墓16（北溝）出土。
16	壺	口径 17.4 器高 (12.6)	- 口縁部は上外方にゆるやかに外反する。 - 頸部外面を沈線2本で3段に分け、中段にコの字重ね文を充塞する。下段は複合鋸歯文か。	- 外面は縦のハケ調整後、ヘラ磨きか。 - 内面は調整不明。	- 砂粒を多く含む。 - 焼成やや不良。	淡褐色	- 頸部より下部を欠失する。 - 方形周溝墓14（東溝）出土。 - 図版第18-15
17	壺	口径 8.2 腹径 9.8 底径 2.2 器高 (8.1) 容量 0.3	- 口縁部は外面に稜を形作り、直立する。 - 口縁外部の稜線部に沿って沈線1条をめぐらす。 - 体部は下ぶくれとなる。	- 外面と口縁部内面は横のヘラ磨きする。 - 内面腰部は横のハケ調整する。	- 砂粒を若干含む。 - 焼成良好。	淡褐色	- 口縁端部と底部下端を欠失する。 - 方形周溝墓17（東溝）出土の流込

							品。
18	細 頸 壺	口径 12.5 腹径 26.8 底径 6.0 器高 29.7 容量 5.8	・口縁部は内湾する。 ・口縁部外面に横溝状文2条、頸部から肩部にかけて横溝直線文6条、同波状文4条の順で施す。 ・体部は下ぶくれとなり、強く張り出す。	・外面は頸部に縦の、腰部に斜めのハケ調整痕が残るが、他はナデ仕上げる。 ・内面は頸部と腰部に横のハケ調整痕が残るが、他はナデ仕上げる。	・砂粒を多く含む。 ・焼成やや不良。	・灰褐色	・体部の一部を欠失する。 ・方形周溝蓋1 (南溝) 出土。
19	広 口 壺	口径 20.2 腹径 26.0 底径 7.3 器高 37.5 容量 7.3	・口縁部は上外方にゆるやかに外反する。 ・口縁部に横溝状文1条、頸部から肩部にかけて横溝直線文4条、同波状文1条、同直線文3条の順で施す。 ・底部はやや突出し、下面は上げ底をなす。	・外面は斜めのハケ調整するか腰部より上はその後へラ磨きする。 ・内面も斜めのハケ調整し、肩部に指面正痕がのこる。	・砂粒を多く含む。 ・焼成やや不良。	・赤褐色	・完形品である。 ・方形周溝蓋20 (西溝) 出土。帝相。 ・図版第18-19

線刻絵画文土器 土器の外面に具象的な物を

描いた例は2個を数える。ともに同一の土壌(土壌306)からの出土品である。まず、20は一部を欠失するが、線刻絵画文は長さ8.0cm、高さ5.5cmを測る。壺の肩部に描いており、四肢を前後に広げて疾走するさまであろう。頭部の角と思える部分の上部にも列点1個を描く。次に、21は頭部と胴部の一部のみ遺存し、現存長2.1cm、現存高2.3cmを測る。やはり壺の肩部に描いたものである。20とは異なり、頭部に角を描かない。ともにシカを描いたものと思

え、弥生時代中期に属す。シカは土器や銅鐸などに絵画文として多出する。ただその場合、角に枝を表現する例が多数を占める。本例の場合、角の表出の有無によってまず雌雄のシカを描いたものと考えることができる。ただ、敦賀平野周辺には現在でも多数のカモシカが棲息しており、本例の角が枝分かれていないので、洞角を有するカモシカの可能性を考えておきたい。そして、仮にカモシカとすれば、その成獣は雌雄とも角を有するので、本例は成獣と幼獣を描いたもの



第26図 吉河遺跡出土土器線刻絵画文拓影図 (縮尺1/2)

といえる。

B 石器 (第27・第28図、図版第20～第22(1))

石器には打製と磨製の品がある^⑧。これまでに調査された北陸の同期の遺跡に比べ、磨製石剣を初めとする磨製石器類が多いことは注目される。出土石器のうち主要な品の種類とその個数は下記の通りである。なお玉作りに関係する石器については、別項で言及することとし、本項からは除いた。

- | | | | | | |
|---------------|--------|------------|-------|------------|--------|
| (1) 石 | 鐵 143個 | (2) 磨製石剣 | 8個 | (3) 石 | 鹿丁 75個 |
| (4) 太型蛤刃石斧 | 89個 | (5) 柱状片刃石斧 | 6個 | (6) 扁平片刃石斧 | 16個 |
| (7) 小型方柱状片刃石斧 | 4個 | (8) 石 | 錐 21個 | (9) 石 | 小刀 1個 |

次に各遺物について説明するが、時期未詳の品が多いので所屬時期については省略する。また図示した遺物については、観察表(第3表)を付したので参照されたい。

石鐵 磨製13個、打製130個を数える。磨製石鐵の形態とその個数は、平基式無茎3個(3・4・7)、凹基式無茎2個(1)、凸基式無茎3個(5・8)、凸基式有茎2個(2・6)、不明1個である。打製石鐵の形態とその個数は、平基式無茎20個(9・13)、凹基式無茎21個(11)、凸基式無茎56個(10・12・15・16)、凸基式有茎13個(14)、不明20個である。磨製石鐵では粘板岩を、打製石鐵では砂岩を使用する例が多い。石鐵のうち1は、両面穿孔による装着孔を有する。

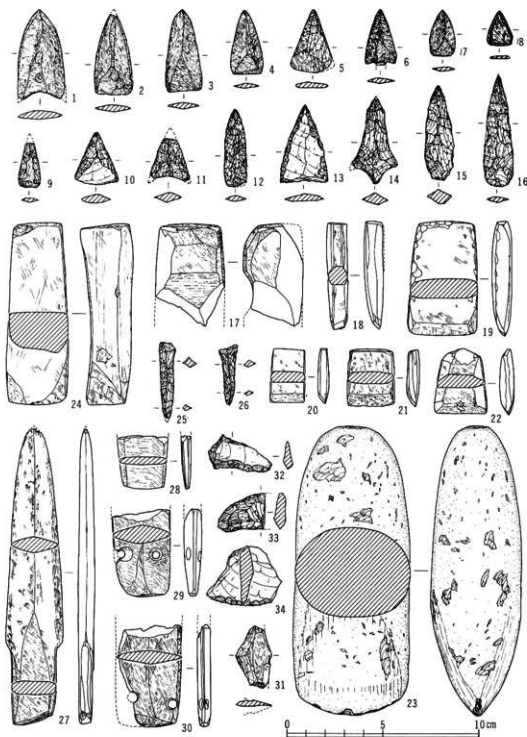
磨製石剣 磨製石剣は8個を数える。有樋式石剣(31)が1個あるほかは、全て鉄剣形石剣である。27は先端部を発掘時に僅かに欠損するものの、ほぼ完形品である。両側で鑄を有す剣身部は丁寧に研磨している。また茎部は基端を斜に作り出し、やや粗い研磨痕を残している。29・30は鑄を有す無関の鉄剣形石剣の基部であり、両面穿孔により1対の装着孔をうがっている。

石鹿丁 磨製75個、打製1個を数える。全て破損品であり形態の全容を窺える例は少ないが、半月形内彎刃・半月形直線刃(337～39)、台形内彎刃(35)の各形態が認められる。また各形態とも大型と小型の品がある。石材は千枚岩を使用する例が多い。このうち35はほぼ完形で出土した大型品であり、上刃に平行して2対の紐通しの小孔(うち1個は未貫通)をうがっている。また内彎する刃部には、横位の丁寧な研磨痕が認められる。

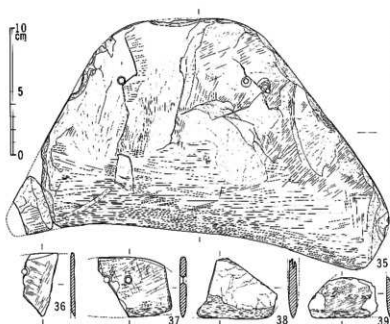
太型蛤刃石斧 完形品・ほぼ完形品12個を含む89個を数える。平面形には、側辺が平行する例、側辺が膨らみ基部中央に最大幅をもつ例、刃部に最大幅をもつ例がある。また断面形は円形から楕円形を主体とする。23は側辺が平行し、断面形がほぼ円形を呈す品であり、使用による刃部先端の磨滅は著しい。

柱状片刃石斧 6個を数えるが、全容の窺える例は無い。17は方柱状に仕上げた挾入石斧の基部であり、「えぐり」部には横位の研磨痕を残す。

扁平片刃石斧 大型品2個、中型品7個(19)、小型品3個(20～22)、不明4個の、総数16個



第27圖 吉河遺跡出土石器実測圖(縮尺1/2) 石鏃(1~16)、柱狀狹入片刃石斧(17)、小型片柱狀片刃石斧(18)、扁平片刃石斧(19~22)、太型船形石斧(23)、砥石(24)、石鏃(25~26)、石劍(27~31)、刃器(32~34)、石小刀(33)



第28図 吉河遺跡出土石庖丁実測図 (縮尺1/3)

を数える。平面形は基部が若干狭い長方形の例 (19-21) を主体とし、台形の例 (22) も存在する。また断面形は長方形または楕円形を呈す例が多い。

小型方柱状片刃石斧
ほぼ完形2個を含む14個を数える。断面形には四角形・多角形の例がある。

石錐 19個を数える。下作り用の石錐と異なり、剝離面が全面を被っている。形態には、

無頭棒状・有頭棒状・柳葉状・逆三角形のほか、不定形な剝片の先端を錐部とする例もあり多様である。このうち25は無頭棒状の品であり、26は若干の頭部を有す棒状の品である。錐部の断面形は、共に菱形を呈す。

石小刀 1個を数える。緩く彎曲する両側縁に調整剝離を加え、断面形はほぼ菱形を呈す。その形状から石小刀と考えられる品である。なお刃部には、使用による刃潰れが認められる。

砥石 直方体を呈す定形な品と不定形な品があり、総数 209 個を数える。24は定形品であり、断面形は不正な六角形を呈する。8面全てに磨痕を残し、特に上面の使用が著しい。

不定形刃器 両面に大剝離面を残し、断面凸レンズ状を呈す剝片の縁辺に調整剝離を加え、刃部とした品を主体とし、総数 115 個が出土した。刃部に使用による顕著な刃潰れを認める品も存在する。34は三角形を呈す剝片の一边に調整剝離を加え、刃部とした例である。

上述以外の石器として、凹石、磨石、敲石を含む磨石類40個、礫品4個があるほか、軽石44個がある。

第3表 吉河遺跡出土石器観察表

図	番号	種類	材質	大きさ (cm)			重さ (g)	備	考
				長さ	幅	厚さ			
27	1	磨製石錐	砂岩	4.69	2.45	0.42	5.90	・磨32出土。・岡版第20-(1)-1	
	2	"	粘板岩	(4.22)	1.97	0.43	(3.72)	・方形隅溝墓1南溝出土。・"	---2
3	"	"	"	4.31	1.91	0.32	2.59	・B9包含層出土。・"	---3
	4	"	"	3.35	1.72	0.31	1.98	・磨32出土。・"	---4